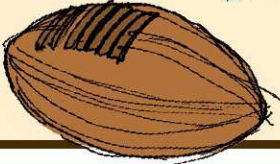


大和川の付け替えて消えた  
幻の吉田川跡地を  
ぶらり。



## 東大阪散策MAP

古地図研究家・本渡章さんと  
「河内名所図会」を歩く

# 吉田川 跡地

### コース② 吉田～河内花園

- 近鉄吉田駅 - 中甚兵衛顕彰碑 - 川中郎・屋敷林
  - 松原宿跡 - 賽之神神社 - 大津神社
  - 花園ラグビー場 - 吉田春日神社 - 道しるべ
  - 河内花園駅 - 花園商店街
- ＜所要時間＞  
2時間30分

出発点の吉田。「吉田川」が流れる大きな村がかつては「船場」と呼ばれ栄えた地です。昭和26年(1951)に吉田船場が町名になりました。戦後の新しい街づくりをめざして多くの企業が集まりました。現在の町名「吉田本町」は、全国の本町を名乗る町と同じく、その市の中心地を意識したのも、一方、吉田島之内は職場近接の居住地域として成長。吉田の冠を外して、ただの「島之内」になったのは、すっかり東大阪の街になじんだらして。町名の変遷に街の歴史のアーアありですね!

中甚兵衛顕彰碑  
中甚兵衛は河内河内郡今(いま)村の庄屋の家出身。当時、たびたび洪水に見舞われていた大和川流を水吉から守るため大和川の付け替え運動を中心になって進めた人物の一人だ。安治川を開削した河村監置の碑も大きい。それよりも高くて立派に見える、地元の人々から愛される。大正3年(1914)、甚兵衛に從五位が贈られたのを記念して建立された。

川中郎・屋敷林  
広大な敷地に津つ茅葺屋根の川中郎を囲む約5000平方メートルの屋敷林は、海や橋など突如なる木や竹、キノコなど食材や用材に結びつくものが多くあり、豪華さだけのためにないところから村のありと暮らしが窺われる。昭和59年(1984)、大阪府で初めての「緑地保全地区」に指定された。

### 大津神社

創建は平安時代。津速比売(つはやのひめ)を祀る。昔から「津」といって港の意味で、古代～中世を通じて吉田川流域にある湖沼の水辺だったことを考えると、大津神社は津の守り神だと思える。住所は水走(みずはい)で、この地を開発した水走氏の拠点だった。大津神社に中臣氏(藤原氏)の氏神の穴見屋根命(あめのこやねのみこと)が祀られているのも、水走氏が中臣の一族だったからだろう。水走も吉田春日神社のある吉田船場も船が活躍した水辺の地。神代の昔から船通とつながる町の物語が見えてくる。

### 賽之神神社

旧吉田川の堤防の上に建つ。賽の神はお堂ではなく祠(ほこら)に祀られる身近で小さな神なのに。賽と呼ぶには随分立派なところに鎮座し、両腕をこつて古木が固め、よほど大事にされているようだ。賽の神は「境界」を守る神。川の氾濫を防ぐためか、あるいは近くに長(うしろ)＝方角の鬼門＝北東を意味する)という地名があり、旧村(新家、本郷)から見てここが北東にあたることから創建された可能性がある。

### 松原宿跡・道しるべ

松原宿は江戸時代に暗越奈良街道の中で唯一置かれた宿場で、多くの旅人が往來した。かつての道には地蔵、音吉が祀られ、「右ならいば道」東大阪通と刻まれた道標が残る。

### 江戸時代のガイドブック「河内名所図会」を見てみよう!



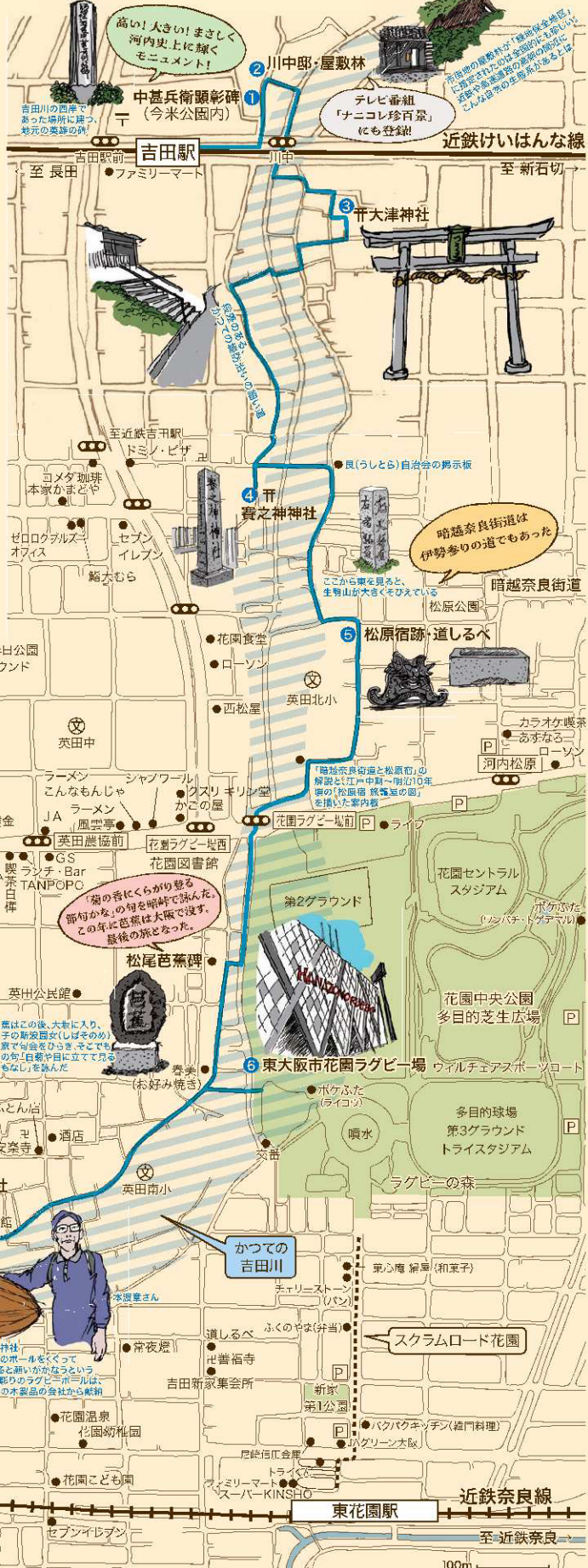
「河内」は大和川の東部一帯の国名で、北河内、南河内に挟まれた中央部が「中河内」。東大阪はその中心でした。江戸時代は街道の往来が盛んで、「河内名所図会」には東大阪市域から45カ所の名所と標榜19カ所が載っています。中でも楽しいのはこちらが載っています。人魚の二造を出て、北人飯市を演り、生垣山を越えて奈良へと続く暗越(くらがりぞえ)奈良街道の宿場、松原宿の茶店の風景です。まん中で老茶が2人餅を食べ、隣に餅を売る男衆(おとこし)とそのお客さん。右端に餅をこねる男衆。餅をちぎって丸める女子衆(おなごし)。できたての餅が美味しい。緑台でやれやれと休む僧と餅にかぶりつく小僧の表情がなんともいえない。往來では雪道に旅姿の人々や片貝いいた燈籠かきも。左上にある身揃庵村が街道を歩いたときに落込んだ餅が「餅は口くれば夜は夜明けはよと餅く。からち道治いの春の瀬わいがなむてきます。

### 東大阪市花園ラグビー場

秩父宮のお声がかかり昭和4年(1929)に誕生した日本初のラグビー専用スタジアム。所在地は建設当時、大阪府河内郡英田村大字吉田花園と呼ばれていた。江戸時代の旅行記「南遊紀行(貝原益軒著)」には花園の名が紹介されている。新時代スポーツのラグビーには草のある地名がぴったりだったのだから。近畿河内花園開きの大正4年(1915)開設当時の名は「花園駅」で、ラグビー場が花園を名乗るより先。東花園駅はラグビー場と同年生まれで、開設時の名は「ラグビー運動場前」だった。

### 吉田春日神社

拝殿に奉納された大阪のラグビーボールが有名な通称「ラグビー神社」。総局の形も御朱印も吉田春日神社の「日」の字がラグビーボールの象形文字で、ラグビーの聖地・花園の守り神だ。春日神社は藤原氏の氏神で、藤原氏のルーツは中臣氏。なかでも中臣鎌足は、中大兄皇子とともに大化の改新で日本史を揺るがした人物として有名。2人の出会いは『日本書紀』によれば藤原の会だった。蹴鞠とラグビー、国も時代も異なる球技が千数百年の時を越え、奇縁の糸で結ばれたと思えば、ラグビーワールドカップ2019日本大会を遂にした花園の盛り上がりもうなずける。



「梅の香にくらがり整った節句かな」の句を解時で詠んだ。この年に色紙は大阪で没す。最後の旅となった。

昔はここ、大和に入り、男子の新渡戸(しばせめ)の歌で白鳥をひらき、そこの夢のち「白鳥を目に立てて見る夢もなし」を詠んだ。

「水邊さん」

100m